

## 企業結合(ステップ2) のれんの償却処理の取扱いの検討

### 1. 前回までの議論の分析

ディスカッション・ポイント1	
ステップ1 現行基準における「規則的な償却を行う方法」の考え方、その根拠について、どのように評価するか。	
内容	分析
企業結合後の利益計算の考え方	取得のれんは投資の一部を構成し、事業買収に伴う将来収益のコストであるため、費用収益の対応の観点から規則的償却のほうが企業結合後の利益計算が適正になるという意見と、定期的に厳格な減損テストで価値の減価を測定するほうが経済実態をより適切に表わすという意見の両論があった。
自己創設のれんの考え方	非償却は実質的に自己創設のれんが計上されて問題があるという意見と、のれんの価値は計上後も減価しないことがあり得るため、自己創設のれんの指摘は必ずしも当たらないという意見の両論があった。
費用の二重計上の見方	規則償却は償却費とのれんの価値を維持する費用が二重計上となる点を指摘する意見と、両者の費用は性格が異なるため二重計上の指摘は当たらないという意見の両論があった。
償却期間と減損テストの関係	のれんの償却期間は恣意的になりやすいと指摘する意見と、取得の対価の算定や減損テストにおいて将来キャッシュ・フローを見積もるため償却年数の判定は可能であるという意見の両論があった。
経営管理上の考え方	経営者は償却後の利益を重視しているという意見と、償却費控除前利益も意識しているという意見の両論があった。
ステップ2 コンバージェンスの観点から、のれんの償却についてどのように考えるか。	
内容	分析
コンバージェンスの考え方	IFRSと米国会計基準が非償却のため、日本基準も非償却に合わせるべきという意見と、我が国の考え方が国際的な会計基準の考え方と異なる場合にはその考え方を主張していくべきという意見の両論があった。
ディスカッション・ポイント2	
仮に連結ベースでのれんを非償却とすることとした場合、連単一致のコスト(デメリット)と連結先行のコスト(デメリット)を踏まえ、単体の取扱いをどのように判断するか。	

内容	分析
連単一致	税務の問題が少ないことや単体ののれんの重要性の観点などから、連単一致とすべきという意見があった。
連結先行	これまでの我が国における考え方を尊重する観点や中小企業における減損テストの実務能力に懸念があるなどから、連結先行とすべきという意見があった。

## ２．主な対立軸

	償却	非償却
会計上の考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 企業結合の成果たる収益と、その対価の一部を構成する投資消去差額の償却という費用の対応が可能になる。</li> <li>● 取得のれんは投資原価の一部であることに鑑みれば、規則償却は、投資原価を超えて回収された超過額を企業にとっての利益とみる考え方と首尾一貫する。</li> <li>● 取得のれんは時間の経過とともに自己創設のれんに入れ替わる可能性があるため、償却処理は、非償却による自己創設のれんの実質的な資産計上を防ぐことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 取得原価を無形資産に配分する手続や減損処理の頻度などを見直すことで、減損テストのみとする方法のほうがより経済実態を適切に表すことができる。</li> <li>● 取得したのれんの価値が自己創設のれんに置き換えられると考えられるとしても、その価値を維持するために費やされた費用とのれんの償却費の双方が認識されるということの有用性については、疑義がある。</li> </ul>
コンバージェンス	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 我が国の考え方のほうが合理性が高いと判断する場合は、コンバージェンスするべきではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● IFRS と米国会計基準がいずれも非償却である基準については、基本的にコンバージェンスを図るべきである。</li> </ul>

上記の主張を踏まえると、以下のように対立軸を整理することが考えられる。

償却・非償却の考え方は両者とも一定の論拠があることを踏まえると、もっぱら国際的な会計基準とのコンバージェンスを重視して、非償却に変更すべきである。

現状の日本基準の基本的な考え方と国際的な会計基準の考え方が対立する中で、コンバージェンスのみを理由とした会計基準の変更は合理的根拠が乏しい。このような局面において、コンバージェンスすることに対する市場関係者の十分なコンセンサスが得られるまでは変更すべきではない。

### ３．考えられる対応案

#### （１）連結非償却、単体償却（連結先行）（Ａ案）

- ✓ 上記の観点を重視すると、非償却処理に変更することが考えられる。この場合のコンバージェンスに対する考え方は以下のとおりである。
  - ◇ 米国会計基準とIFRSのコンバージェンスが終了している項目は、基本的に、国際的な会計基準とのコンバージェンスを進展させるべきである。
  - ◇ GESRの同等性評価上は「重要な差異ではない」とされていたが、のれんの償却の取扱いは国際的な会計基準との間の差異の象徴的な処理として取り上げられることが多く、このような観点からコンバージェンスを図るべきである。
- ✓ この場合、連結先行とするかが論点となる。
- ✓ 個別財務諸表基準性の原則に加えて、税務の問題が少ないことや単体ののれんの重要性の観点などから、連単一致とすべきという意見がある。
- ✓ 一方、コンバージェンスの観点から連結上の扱いは非償却に変更するとしても、単体に適用する基準はこれまでの我が国における考え方を尊重し、償却処理を維持すべきという意見が聞かれる。
- ✓ また、単体も非償却とした場合に、会計監査を受けない中小企業等が厳格な減損テストを行うかどうか、その結果、分配可能額の算定が適切に行われるかどうかを懸念する意見がある。
- ✓ 上記を踏まえ、単体検討会議で示された方向性の考え方もしん酌して比較衡量すると、連結先行とすることが考えられる。

#### （２）現時点では結論を出さず償却処理を継続する。（Ｂ案）

- ✓ 上記の観点を重視すると、現時点で結論を出さず償却処理を継続することが考えられる。この場合のコンバージェンスに対する考え方は以下のとおりである。
  - ◇ 現状の日本基準の基本的な考え方と国際的な会計基準の考え方が対立する場合、コンバージェンスを図ることは相当慎重である必要がある。のれんの現行の扱いは、国際的な会計基準が非償却を採用する中で判断されたものであり、ASBJ発足以来、適正性を主張してきた処理である。
  - ◇ コンバージェンスの観点から連結上の扱いは非償却として、単体は従来からの考え方を維持する連結先行を採用した場合、連結と単体で異なる思想を用いることとなる。同じ日本基準の体系の中で、このような処理を行うことは、会計基準の信頼性を失わせる可能性がある。
- ✓ 現状の日本基準の基本的な考え方と国際的な会計基準の考え方が対立する項目については、市場関係者のコンセンサスが得られるまで十分に議論を尽くす努力が必要であると考えられる。のれんの償却とは問題の性格が異なるものの、現状の日本基準の基本的な考え方と異なるという点では、リサイクルの問題も同様である。今後、金

融商品や退職給付ステップ 2 においてリサイクルの議論が行われる予定であり、リサイクルの議論とのれんの議論は、同時期に結論を出していくことが考えられる。

**ディスカッション・ポイント**

✓ 対応案（A 案、B 案）について、どのように考えるか。

以上

(参考1) 前回までの意見概要

<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">ディスカッション・ポイント1</div>		
ステップ1		
現行基準における「規則的な償却を行う方法」の考え方、その根拠について、どのように評価するか。		
償却が適切と考える根拠	非償却が適切と考える根拠	ディスカッション・ポイント3
<ul style="list-style-type: none"> <li>・取得のれんは取得原価と取得時の識別可能資産及び負債の差額である。しかも、識別された資産と負債がどのように測定されたかにもよる。したがって、そのような「差額概念ののれん」について、その価値が永続すると考えることは一般的に困難であり、「耐用年数が特定できない無形資産」とは明らかに性格が異なる。</li> <li>・のれんの償却年数の決定は大変だが、その後は実務上会計処理が容易になる。また、減損テストを毎期行うことは煩雑である。</li> <li>・減損テストにおいて将来キャッシュ・フローの見積りが可能ならば、償却期間の見積りも可能である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・のれんの規則的償却を行わないという前提条件として、次の2つが挙げられる。                             <ul style="list-style-type: none"> <li>(a)無形資産の包括的な会計基準の開発(これにより、投資取得差額の無形資産への配付対象が広がることから、のれんの金額は相対的に少なくなる効果がある)</li> <li>(b)のれんの減損テストの厳格性を高め、かつ頻度を見直す</li> </ul> </li> <li>以下の根拠のいくつかは、この2つの条件が満たされることを前提に述べられている。</li> <li>・のれんを規則償却する場合、償却期間・償却パターンを経済実態に即して適切に決めることは難しく、結果的に恣意的になりがちなため、定期的に厳格な減損テストを行う方が、経済実態を財務諸表に適切に表していくことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ のれんの償却期間・償却パターンは経済実態に即して適切に決めることが難しく、恣意的になりがちという意見に対して、有形固定資産の減価償却では耐用年数を見積って費用の期間配分を行っているが、この点をどう考えるか。</li> <li>✓ 非償却としたうえで定期的に厳格な減損テストを行う方が、経済実態を財務諸表に適切に表していくという意見がある一方で、単体検討会議の報告書では、「非償却として減損のみとした場合、事業環境の悪化に伴い一気に</li> </ul>

		<p>損失が表面化し、景気が悪化した場合、不安定さが増幅する。」という意見が示されている。この点をどう考えるか。</p> <p>✓ 非償却として減損テストを毎期行うことは煩雑であり、ある期に減価が全く認識されない可能性がある方法よりも、一定期間にわたり規則的な償却を行う方が合理的とする現行基準の根拠をどう考えるか。</p>
<p>・取得のれんがどのような要素で構成されているかを踏まえる必要があるが、仮にその大部分が超過収益力であるとしても、競合相手が常に参入するのがビジネスの常であり、取得のれんの価値は減価していくものと考えerほうが一般的であると思う。取得のれんの償却を行わないと、その減価分について結果的に自己創設のれんが計上されることになる。</p>	<p>・買収後ののれんの価値がシナジー効果で当初よりも増加することもありえるし、非償却の場合もその増加分は認識しない。逆に価値が減価すれば、のれんを減損処理すれば良いので、のれんの非償却が結果的に自己創設のれんを認めることになるという批判には当たらない。</p>	
<p>・のれんの償却費とのれんを維持する費用は性格が異なり、費用の二重計上の批判に当たらない。</p>	<p>・のれんの非償却は、自己創設のれんの計上になるという批判があるが、逆に、のれんの償却費を</p>	

	<p>定期的に計上し、のれんの価値を維持するためにかかる費用(広告費・開発費等)を計上すれば、費用の二重計上になる弊害がある。</p>	
<p>・取得のれんは投資の一部を構成しており、事業買収に伴う将来収益のコストである。投下資本の回収の面からは、のれんの償却後で利益が計上できるか否かが重要であり、収益と費用の対応の観点からものれんは償却すべき資産である。</p>	<p>・財務諸表利用者や企業経営者の中には、業績評価やEPSの計算上、のれんの償却費を考慮していないという意見があり、のれん償却費の財務報告上の有用性に疑問がある。</p>	<p>✓ 企業経営者はのれんの償却費を考慮していないという意見がある一方で、単体検討会議の報告書では、「のれんの償却後で利益が計上できるか否かが重要」という意見が示されている。この点をどう考えるか。</p>
<p>・のれんの償却・非償却については、それぞれの論拠に一長一短がある。現行の日本基準は両者を比較考量して償却を選択しているが、どちらの考え方が良いかは言いきれない。</p> <p>・考え方の面から償却・非償却を選択することは難しく、実務的な面から検討していく必要がある。</p>		
<p><b>ステップ2</b> コンバージェンスの観点から、のれんの償却についてどのように考えるか。</p>		
<p>償却が適切と考える根拠</p>	<p>非償却が適切と考える根拠</p>	<p>ディスカッション・ポイント3</p>
<p>・IFRSや米国基準では非償却であるので、ビジネス環境の側面からはイコール・フットイングにすべきという点も理解できるが、投下資本の回収という点や、自己創設のれんの計上の可能性、減損会計の適切な運用への懸念も考慮する必要がある</p>	<p>・コンバージェンスによって、のれんの規則償却をしないで、より厳格性があり頻度の高い減損テストをした方が、ステップ1で説明されているように、企業の経済的実態を適切に表示し、かつ財務諸表作成者及び投資家に有用な情報を提供す</p>	<p>✓ IFRSと米国会計基準のコンバージェンスが終了していることをもって、日本基準も合わせるべきという意見と、我が国の考え方が国際的な</p>

<p>と考える。会計基準のコンバージェンスは、企業の経済的実態をより適切に表す、高品質に向かうものとして位置付けるべきであり、この観点を踏まえると現行の取扱い(償却と減損の併用)の方が適切と考えられる。</p>	<p>ることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 米国基準及び IFRS がいずれものれんを償却しないため、日本基準で償却を続けるメリットは少ないと考えられる。</li> <li>・ IFRS 及び米国基準はいずれものれんは非償却であり、日本基準だけがのれんを償却することは望ましくない。</li> </ul>	<p>会計基準と異なる場合にはその考え方を主張していくべきという意見がある。この点についてどう考えるか。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 無形資産の包括的な基準の開発により、のれんの金額を少なくする考え方が適切ではないか。これにより、のれんの非償却のデメリットは減少すると考えられる。</li> <li>・ IFRS 及び米国基準と同様に、我が国も無形資産の会計基準の整備を進めているが、従来通りのれんを償却することは一貫性に欠ける。</li> </ul>	
<p><b>ステップ3</b> 上記を踏まえ、連結の取扱いをどのように判断するか。( 非償却にすべきと判断する場合にはディスカッション・ポイント2についてもご意見をお伺いしたい)</p>		
<p>償却が適切と考える根拠</p>	<p>非償却が適切と考える根拠</p>	<p>ディスカッション・ポイント3</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ステップ1で現行の方法が適切と考えるため。</li> <li>・ のれんの会計処理はリサイクリングとともに、日本基準の存在意義に関わるものである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ステップ1で非償却の方が適切と考えるため。</li> <li>・ コンバージェンスの観点から非償却が適切。</li> </ul>	<p>✓ 「のれんの会計処理はリサイクリングとともに、日本基準の存在意義に関わるものである」という意見をどう考</p>



		えるか。
<p><b>ディスカッション・ポイント2</b></p> <p>仮に連結ベースでのれんを非償却とすることとした場合、連単一致のコスト(デメリット)と連結先行のコスト(デメリット)を踏まえ、単体の取扱いをどのように判断するか。</p>		
<p>連単一致が適切と考える根拠</p> <p>・ 税務上の問題は少ないことや、財務諸表利用者の理解が容易になるため、特に理由がない限り、連結と単体を共に償却しないことが適切。</p> <p>・ 税務上損金経理要件はない。単体でのれんが生じるケースは少ない。このため、連単分離する理由は全くなく、連単共に非償却とすべき。</p>	<p>連結先行が適切と考える根拠</p> <p>・ 連結財務諸表作成の一般原則における、いわゆる準拠性又は規準性の原則によると、連結財務諸表は個別財務諸表を基礎として作らなければならない。このような観点からは、連単一致が原則である。一方、実務面からも、連結先行した場合にはそれに伴うコストやデメリットがあることから、基本的には連単一致であるべきである。しかしながら、現実問題としては税務上の懸念等を指摘する人々に配慮して、それらの懸念が解決されるまでは、当面連結先行をすることは止むを得ない。また、単体検討会議からの報告書による意見を、十分斟酌する必要があることも考慮した上で、連結先行をすることには異論がない。しかし、だからといって、連結上までコンバージェンスするべきではないという考え方には、賛同できない。</p> <p>・ 中小企業が適切に減損テストを行うかどうか、</p>	<p><b>ディスカッション・ポイント3</b></p> <p>✓ 仮にコンバージェンスの観点から非償却とする場合、連単一致にすると、企業結合後の利益計算の観点や自己創設のれんの計上の問題などの懸念が連単とも残るが、この点をどう考えるか。</p>

	<p>その結果、分配可能額の算定が適切に行われるかどうかにつき、会社法の観点から懸念がある。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・日本の文化に根ざした会計を守るならば、単体は現行基準を維持すればよい。</li></ul>	
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

以上